

【研究ノート】

参拝者数と実施件数からみた近年における宮城県仙台市の「どんと祭」の特徴

THE STUDY ON NUMBER OF PARTICIPANT AND FESTIVAL OF “DONTO-SAI”: A
CASE IN SENDAI CITY, MIYAGI PREFECTURE

小久保（高橋）嘉代
青森大学非常勤講師

" Donto-sai " is the fire festival performed in the site in a shrine from nightfall on January 14 to dawn on the 15th. In recent Sendai city, this festival is held with approximately 140 place every year. " Donto-sai " to which more than 1000 people come is here about 30 percent from 20 percent of the total number of " Donto-sai " held in Sendai city. The large-scale percentage of "festival" is higher than other areas in Izumi ward, Sendai city. There are many large scale festivals in the area with the new town.

Keywords: Donto-sai, new town, number of participant, festival

1. はじめに

本稿では宮城県仙台市内において開催される「どんと祭」に置いて現れる地域的特性に注目する。「どんと祭」とはいわゆる「左義長」の仙台市内および近郊における一般的な呼称で、1月14日の夕刻から15日にかけて寺社等の境内地において正月飾りや古い神符等を燃やす小正月の火祭りとされている。

現在この祭は仙台市内のほぼ全域において開催されている。仙台市消防局の報告によると、「どんと祭」の実施件数(会場数)は毎年百数十か所、これらの会場における延べ参拝者数は20万人から30万人にのぼる。この中でも大崎八幡宮(仙台市青葉区)で開催される「松焚祭」は、仙台市の冬の観光資源の一つとして当日の様子は地元マスコミにおいても毎年欠かさず報道され、2005(平成17)年には仙台市無形民俗文化財にも指定

された¹。このように、仙台市内では広く認知されている祭事である一方、仙台市内の「どんと祭」についての先行研究は限られている。市内のほぼ全域にわたって実施されているのにも関わらず、「松焚祭」等の少数の事例を除き、「どんと祭」については分明になっていない点もあり、仙台市内の「どんと祭」を網羅的に分析した研究もいまだ、多くはない。そこで本稿では仙台市内全域で開催されている「どんと祭」の近年における概況把握を目指し、実施箇所および参拝者数からみたこの祭事の地域的特性に注目したい。

¹ もっとも、この祭事が仙台市内の広い範囲において開催されるようになったのは第二次世界大戦の後である。戦前からどんと祭を行っていたのは大崎八幡宮の他数か所程度であり、また正月飾りを寺社等に集めて一括して燃やすという習俗も仙台市内および近郊を等しく網羅するものではなかった。

2. 「どんと祭」先行研究、および本稿の課題について

近代以降の仙台市内の「どんと祭」を網羅的に捉え、現代に至るまでの変容を論じた研究としては安藤直子（2006）が挙げられる。安藤は宮城県内を主要販路とする地方紙『河北新報』（1897年創刊）中の「どんと祭」関連記事を取りあげ、明治期から平成期に至るまでのその内容の変化に注目した。安藤の指摘によると、昭和30年代までの同紙の記事では、「どんと祭」と並んで、これ以外の一連の小正月行事群²も小正月の習俗として取りあげられていたのが、昭和30年代以降の記事では「どんと祭」が目立って大きく取りあげられるようになり、他の小正月行事群の扱いが相対的に後退してゆくに至る。この現象について安藤は「どんと祭」の観光資源化・「地域おこし」資源化の進行によるものと分析する。更に安藤は昭和50年代以降、寺社を会場とするのではなく、公園や空き地を会場としたニュータウンの町内会が運営する「どんと祭」の記事が散見されるに至ったことにも注目し、正月送りの神事として行われていた「どんと祭」が住民の親睦・交流の場としての性格を強めてくるに至ったと論じている。

「どんと祭」についての網羅的な調査・分析が未だ限られている中、新聞とその記事という、その時々最新の情報を伝達することを目的としたメディアを用いて各時代の「どんと祭」の姿を確認していった安藤の研究によって、近代以降の「どんと祭」とその変化についての概況把握が可

能になった。とはいえ、「どんと祭」の最新情報を確認できる資料は新聞記事に限られない。事物の伝達をその主な目的とし、文章という形をとって事物の一角を表現している新聞記事とは異なった目的・異なった視角から編まれた資料もまた、各時代における「どんと祭」の機能・意味を分析するための有効なツールたり得るだろう。

新聞記事という質的データを通して近代以降の「どんと祭」が辿った変容の過程を描き出そうとした安藤に対して、「どんと祭」の実施件数とその参拝者数という量的データに注目して近年の「どんと祭」の概況把握を試みたのが高橋嘉代（2010）である。高橋は仙台市消防局の「どんと祭」警備に関する資料から、2008（平成20）年から2010（平成22）年までの各年次における「どんと祭」の実施件数・参拝者数に注目した。高橋は数万人単位の人出がある「どんと祭」会場は仙台市内でも数少なく、参拝者数1000人未満という、規模の比較的小さい会場が全体の7割程度を占め、近年の「どんと祭」では多数の参拝者を集める会場と参拝者の少ない会場との二極化が現れている蓋然性があることを指摘した。さらに高橋は参拝者数が100人未満の「どんと祭」会場についても分析を試みている。高橋によると参拝者数100人未満の「どんと祭」も毎年3割程度あり、その多くが青葉区西部の旧宮城町に該当する地域にあること、当該地域では1月14日ではなく翌15日に「どんと祭」を行う例が多いことを挙げる。そしてこの結果から高橋は、「どんと祭」は参拝者数の多寡においてのみならず、会場に向かう人々にとっての機能的側面においても二極化している蓋然性を指摘する。すなわち観光資源としての機能が拡大した「どんと祭」と、生活空間に近く、正月飾り等の処分の機能にほぼ特化した「どんと

² 例えば旧宮城町（現仙台市青葉区西部）で行われていた「チャセゴ」（地域子どもたちが家々を訪ね歩き、来訪を受けた家では子どもたちに菓子を与える）（宮城町誌編纂委員会、1969）など、1月14日から15日にかけては「どんと祭」の他にも様々な小正月行事が行われていた。

祭」との機能分化が、現在の仙台市内の「どんと祭」において窺われることを論じている。

行政資料中の数値データに焦点を据えた高橋の研究によって、マスメディアにおいて文章として表現された「どんと祭」の変容とは異なった切り口から「どんと祭」の特徴が一定程度明らかにされたと言えるだろう。特に実施件数・参拝者数を管轄署単位からみた分析作業によって、仙台市内の「どんと祭」における地域的な特徴が一定程度量的に・客観的に把握できたと言いうる。

しかし、高橋の指摘した「大規模どんと祭と小規模どんと祭の二極化」とまで言い得る程の違いは、参拝者数を階級とした「どんと祭」の実施件数の分布からは確認し難い。例えば高橋による2008（平成20）年次の「どんと祭」データを改めてみると、「参拝者数100未満」の「どんと祭」の階級が全階級に占める割合は22.5%、「参拝者数1000以上」の階級では28.5%である。そして「参拝者数100-199」「200-299」「300-399」の3階級の割合もそれぞれ11.9%、11.9%、7.9%となっている。そこで改めて参拝者数の階級を「参拝者数399以下」「400-999」「1000以上」としてそれぞれが占める割合を見てみると、「参拝者数399以下」は54.3%、「400-999」が17.2%、そして「1000以上」28.5%となっている。確かに「参拝者数399以下」および「1000以上」の階級の占める割合はその中間の階級よりも大きくはなっている。とはいえ「400-999」と「1000以上」それぞれの割合の差については「二極化」とまでは言い難いだろう。この点にこの研究の限界がある。

本稿では、これらの先行研究の再検討を目的としている。すなわち「どんと祭」実施件数・参拝者数から近年の「どんと祭」の特徴を概観し、現

在の「どんと祭」がもつ意味と機能の再検討につなげてゆくことが、本稿のねらいである。

先述の先行研究では、近代以降の社会変動の中で「どんと祭」は「観光資源化」「地域おこし資源化」に向かい更には「住民の親睦・交流の場」として従前とは異なった意味・機能を持つようになったことと、実施件数・規模ともに地域差があることが指摘されていた。一方は「どんと祭」の意味と機能とに、いま一方は「どんと祭」の地理的分布と規模に焦点を据えている。それぞれ別の切り口からのアプローチであるのだが、この二つを結びつけることによってより詳細な「どんと祭」分析が可能になると思われる。

そこで本稿では改めて、仙台市消防局の資料から「どんと祭」の実施件数と規模とに注目したい。仙台市内では現在、百数十件におよぶ「どんと祭」が毎年開催されている。しかしその総てが明確に観光資源として扱われているわけではない。安藤は「どんと祭」について「観光（地域おこし）資源化」「住民の親睦・交流の場」という特徴を挙げていた訳だが、この両方を同時に満たしている「どんと祭」、またはこのいずれにも該当しない別の機能をもつ「どんと祭」が存在している可能性もある。観光資源とはされないながらも参拝者数の多い「どんと祭」の特徴は、その可能性を示すものとなると考えられるのである。

そこで本稿では「参拝者数 1000 人以上」という比較的規模の大きい「どんと祭」が、市内のいかなる地域に分布しているか明らかにしたい。

「参拝者数 1000 人以上」という条件を本稿における分析指標として扱う理由は、「どんと祭」に対して外部の者の一定の評価が機能するようになるのが、この「参拝者数 1000 人以上」という条件と言い得るからである。

詳しくは後述するが、仙台市消防局の資料では特に参拝者規模の大きい会場を「主要箇所」として、「主要箇所」の参拝者数を別個に集計している。この「主要箇所」の総てで参拝者数が 1000 人を超えている。「主要箇所」には「松焚祭」を行う大崎八幡宮も含まれているとはいえ、「主要箇所」の総てが「観光資源」とされ、また「観光資源」として受け止められているとは限らない。しかし少なくとも公の機関において「参拝者が他と比べて際立って多い会場（なので警備上特に注意を要する会場）」として扱われており、「どんと祭」運営の外部にある者からの、すなわち「どんと祭」の運営に携わる者たちにとって「他者」と言い得る者からの一定の評価がなされているという点において、「観光資源」とされている「どんと祭」とかなり近い性格をもっていると言い得よう。その一方で「参拝者数 1000 人以上」でありながら現在のところ「主要箇所」とされていない会場もある。これらのことから「参拝者数 1000 人以上」の「どんと祭」は、「観光資源」「地域おこし資源」としての機能をもつもの、そして「住民の親睦・交流の場」の機能を持つもの、それぞれを確認しうる規模の「どんと祭」である蓋然性がある。

「観光資源」「地域おこし資源」「住民の親睦・交流の場」それぞれの機能についての精査は勿論必要であるし、それぞれの明確な定義付けも必要であるだろう。本稿ではこれらの作業にまでは至ることはできないのだが、その前段階の作業として「参拝者数 1000 人以上」のどんと祭が、仙台市内においてどのような分布を見せているかを明らかにしたい。

3. 現在の「どんと祭」の一般的な流れとその特徴

一部例外はあるが、仙台市内の「どんと祭」は一般に 1 月 14 日の夕刻以降より開始する。祭開始に先立ち会場では点火場所等の設営が行われている。「どんと祭」は神送りの神事と認識されていることにより、持ち込み物を集めて点火する場所を注連縄・笹竹で囲んでいる例もある。

所定の時刻になると「火入れ式」「お祓い」として神職等による修祓が行われる。点火の時刻は一般に 16 時台から 18 時台までであり、修祓の後持ち込み物に点火される。「どんと祭会場」では点火（火入れ）の以前から正月飾りや神符、その他縁起物等の持ち込みを受け付けているが、修祓および持ち込み物への点火の時点をもって祭の開始としているのが一般的である。点火の後も正月飾り等の持ち込みは続く。多くの会場では 20 時から 22 時までを祭の終了時刻としており、終了時刻になると火は消され、この時点をもってど

図 1 仙台市泉区・どんと祭会場の事例 1)

(2013 年 1 月 14 日筆者撮影)



神社の境内の一部にコンクリートブロックと雪で正方形の囲いを造り、囲いの中で持ち込み物を焼却している。

図2 仙台市泉区・どんと祭会場の事例2)

(2015年1月14日筆者撮影)



どんと祭の開催中に「巫女踊り」が行われる。「巫女」は会場近隣のニュータウンに居住する女子中学生。「巫女踊り」は祭の運営に携わるニュータウン住民の有志によって創設された。

図3 仙台市泉区・どんと祭会場の事例3)

(2015年1月14日筆者撮影)



丸太を井桁型に組み、その内側と外側に持ち込み物を積み上げている。

どんと祭は終わる。14日中に「どんと祭」を終えた後も、翌15日の早朝に改めて持ち込み物を焼却している会場の例もある。

会場に正月飾り等を持ち込む者において性・年

齢・居住地等による明確な制限は一般に設けられておらず、各人が任意の会場に持ち込んでいる。自宅最寄りの会場に正月飾り等を持ち込む例や、大崎八幡宮の「松焚祭」に正月飾りを持参する例など様々である。持ち込み物を持たない者が「どんと祭」会場への入場を制限されることもない。

一般に、「どんと祭」においては神楽・舞・山車・神輿等は登場しない。これらの様ないわば「見せ物」と言い得る対象が存在している会場も一部見受けられるものの、それらの「見せ物」類が「どんと祭」において不可欠の構成要素とされている訳ではない。また、「神事」とされてはいても常に神社の境内地が会場とされている訳でもなく、公園や空き地等の一角を会場としている例も散見される。「正月飾り類をまとめて燃やす」という点は各会場で共通しているものの、その正月飾り類の持ち込み先・持ち込まれ方・持ち込む者それぞれについても、また祭の際のパフォーマンスの類いにも特に制限は設けられていない(図1・図2・図3参照)。これが現在の「どんと祭」における一般的な姿である。このことから「どんと祭」は非常に可塑性の高い・変化に富んだ祭事となっているとも考えられるだろう。

4. 「どんと祭」実施箇所・参拝者数について

(1) 参照資料について

本稿における「どんと祭」の実施箇所・参拝者数については仙台市消防局作成の「どんと祭実施結果報告書」「どんと祭特別警戒実施結果」の「実施箇所」および「参拝者数」を参照した。

「どんと祭」は屋外で長時間裸火を燃やし続ける祭事である。このため祭事の責任者等は、祭事に先立ち仙台市火災予防条例(昭和48年3月27日条例第4号)第57条「火災とまぎらわしい煙

等を発する行為等の届出」に則って所轄の消防署長に「火災発生届出書」を提出する必要がある。現在仙台市内には消防署の分署が6分署あり、「どんと祭」当日は各分署単位で所管地域の会場の警戒を行っている³。当日各会場より報告された参拝者の数、「火入れ」の時刻、警戒人員数等について「どんと祭実施結果報告書」「どんと祭特別警戒実施結果」等の報告資料が作成される。なお、「どんと祭実施結果報告書」および「どんと祭特別警戒実施結果」については以後「消防局資料」と総称したい。本稿でとりあげる図表はこれらの消防局資料を参照して筆者が作成した。

また「どんと祭」は厳冬期の夜間に実施される祭事であるため、当日の天候や曜日によって実施箇所・参拝者数それぞれに影響が及ぶ。更に2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災での被災により、震災翌年以降の「どんと祭」の開催に大きな影響が出た地域もある。これらの背景を鑑み、本稿では2011（平成23）年から2015年（平成27）年までの消防局資料を使用することとした。

（2）本稿における実施件数・参拝者数の扱い方

消防局資料では、実施箇所・参拝者数については延べ数で記録されている。本稿で扱う実施箇所・参拝者数も消防局資料の記述方針に則り、原則として延べ数で扱う。

ただし同一会場の実施記録として1月14日・15日の両日それぞれにおける参拝者数の記述がある場合には、実施件数は1件分とし、14日分の参

拝者数のみを当該会場の参拝者として扱うこととした。1月14日・15日の両日について実施記録のある会場はごく限られており、15日の実施記録も残されている会場の場合でも参拝者数は14日よりはるかに少なく、あくまでも14日実施分が主たるものとなっている蓋然性が高いからである。

また、「火災発生届書」が提出されたのにもかかわらず、何らかの理由で「どんと祭」を開催しなかった会場がある場合、当該の会場については、「どんと祭」当日の参拝者数を分析するという趣旨により、本稿では実施箇所の中には含めなかった。このため、消防局資料と本稿とでは実施箇所の数値が一部異なる開催年次もあることを断っておく。

5. 参拝者規模からみた「どんと祭」の分布

消防局資料によると、仙台市内のどんと祭実施総数は2011年が148件、2012年から2014年までが137件、2015年が138件となっている。ただし2011年の場合実施総数とされている148件の中に、届出はあったものの中止となった会場が1件あることから、本稿ではこの1件を除いた147件を2011年の実施総数とする。

³ 6分署の内訳は、青葉区が青葉署（青葉区の旧宮城町に該当する区域を除く区域管轄）・宮城署（青葉区旧宮城町の区域管轄）の2分署、宮城野区・若林区・太白区・泉区においては区名を冠す分署が各区1分署ずつとなっている。

表1 「どんと祭」の参拝者数（区／管轄署単位：20011年-2015年） [人（%）]

区	管轄署	参拝者数				
		2011年（金）	2012年（土）	2013年（月・祝）	2014年（火）	2015年（水）
青葉	青葉	136197(46.5%)	157391(53.0%)	117802(53.2%)	123009(48.6%)	160385(55.0%)
	宮城	13500(4.6%)	16623(5.6%)	13036(5.9%)	10803(4.3%)	10901(3.7%)
宮城野	宮城野	18783(6.4%)	21954(7.4%)	14949(6.7%)	21374(8.4%)	23877(8.2%)
若林	若林	18916(6.5%)	16157(5.4%)	12806(5.8%)	17231(6.8%)	18444(6.3%)
太白	太白	41782(14.3%)	36558(12.3%)	28769(13.0%)	37081(14.6%)	36618(12.6%)
泉	泉	63657(21.7%)	48086(16.2%)	34174(15.4%)	43650(17.2%)	41245(14.2%)
合計		292835(100.0%)	296769(100.0%)	221536(100.0%)	253148(100.0%)	291470(100.0%)

(仙台市消防局資料より筆者作成)

表1は2011年から2015年までの各年次における開催地域（管轄署）毎の「どんと祭」参拝者数と、参拝者総数に占める割合を示したものである⁴。この表から、「どんと祭」参拝者数の多寡には少なからぬ地域差が存在していることが伺える。「松焚祭」を開催する大崎八幡宮がある青葉署管轄地域の参拝者数が際立って多いのと共に、他地域における参拝者数・割合についても一定の

地域差が確認される。

続いて表2では各年次の「どんと祭」実施件数（会場数）を示した。参拝者数においては群を抜いていた青葉署管轄地域内だが、「どんと祭」実施件数については他地域より少ない。これに対して宮城署管轄地域（青葉区旧宮城町）・宮城野署管轄地域（宮城野区）・若林署管轄地域（若林区）では、参拝者数はそれぞれ他地域よりも少ないな

表2 「どんと祭」の実施件数（区／管轄署単位：20011年-2015年） [件（%）]

区	管轄署	実施件数				
		2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
青葉	青葉	19(12.9%)	19(13.9%)	19(13.9%)	19(13.9%)	18(13.0%)
	宮城	26(17.7%)	25(18.2%)	23(16.8%)	23(16.8%)	22(15.9%)
宮城野	宮城野	30(20.4%)	28(20.4%)	28(20.4%)	28(20.4%)	28(20.3%)
若林	若林	27(18.4%)	20(14.6%)	21(15.3%)	21(15.3%)	24(17.4%)
太白	太白	27(18.4%)	27(19.7%)	27(19.7%)	27(19.7%)	27(19.6%)
泉	泉	18(12.2%)	18(13.1%)	19(13.9%)	19(13.9%)	19(13.8%)
合計		147(100.0%)	137(100.0%)	137(100.0%)	137(100.0%)	138(100.0%)

(仙台市消防局資料より筆者作成)

⁴ 曜日により参拝者数に変動が生じ得るため、各年次の1月14日の曜日も表1に記した。

表3「どんと祭」主要箇所一覧（2011-2015年）

区	管轄署	主要会場	
		2011年～2014年	2015年
青葉	青葉	大崎八幡宮 東照宮	大崎八幡宮 東照宮 青葉神社
	宮城	諏訪神社	諏訪神社
宮城野	宮城野	榴ヶ岡天満宮	榴ヶ岡天満宮 八坂神社 青麻神社
若林	若林	陸奥国分寺薬師堂	陸奥国分寺薬師堂 七郷神社
太白	太白	中田神社 多賀神社 愛宕神社（向山）	中田神社 多賀神社 愛宕神社（向山） 蛸薬師
泉	泉	賀茂神社 愛宕神社	賀茂神社 愛宕神社 二柱神社
主要箇所数合計		10	16

(仙台市消防局資料より筆者作成)

がらも実施件数は多い。したがって、青葉区旧宮城町・宮城野区・若林区においては他地域と比較すると規模の小さい「どんと祭」が多く分布していることが予測できそうである。

ところで「どんと祭特別警戒実施結果」では、各消防署管轄内で特に参拝者数が多い会場⁵を「主要箇所」としており、それらの会場の参拝者数は「どんと祭特別警戒実施結果」において特に抜粋されて集計されている。2011年から2014年までの「主要箇所」は10件あり、2015年には16件に増やされた（表3）。なお「主要箇所」とされている会場の総てにおいて参拝者数は1000を超えている（表4）。「主要箇所」とする上で特に明確な基準は設けられていないとはいえ、表4の結果から鑑みる限り、コンスタントに「参拝者数1000以上」の会場であることが当該会場を「主要箇所」と扱う上でのひとつの基準とされていると考えられるだろう。

これら「主要箇所」とそれ以外の「どんと祭」の参拝者数を集計したのが表5である。各年次における「主要箇所」参拝者数の割合は一貫して6割を超える。全体の1割程度の会場で総参拝者数の7割近くの参拝者を集め、総参拝者数の3割程度の参拝者が残り9割の会場に散在しているという次第である。

⁵ 消防局によると、「主要箇所」と扱うに際しての具体的な基準は現在のところは特に設けられていないとのことである。

表4「主要箇所」の参拝者数（2011-2015年） [人]

区	管轄署	実施箇所名	参拝者数※				
			2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
青葉	青葉	大崎八幡宮	76602	94548	70272	85010	106769
		東照宮	40500	34800	25550	24500	23900
		青葉神社	(3100)	(3500)	(2800)	(3900)	3900
	宮城	諏訪神社	10850	13650	10876	8315	8500
宮城野	宮城野	榴ヶ岡天満宮	2500	5300	2050	2900	6300
		八坂神社	(1290)	(3077)	(1500)	(4145)	2600
		青麻神社	(1890)	(2074)	(700)	(1975)	2097
若林	若林	陸奥国分寺薬師堂	7300	8000	6000	7800	9000
		七郷神社	(1400)	(1150)	(1050)	(1900)	1600
太白	太白	中田神社	5100	3550	3300	6600	4590
		多賀神社	4900	4900	4370	3600	5150
		愛宕神社(向山)	9500	4500	3450	3900	3800
		蛸薬師	(6280)	(6330)	(3186)	(5820)	8000
泉	泉	賀茂神社	20150	21050	14305	19100	17700
		愛宕神社	5602	2800	5600	3000	3400
		二橋神社	(18000)	(5500)	(2370)	(6000)	2300

(仙台市消防局資料より筆者作成)

※網掛けになっている6か所は2015年から初めて「主要箇所」とされた会場。

表5「主要箇所」どんと祭会場・「主要箇所」以外のどんと祭会場の参拝者数

(2011年-2015年) [人(%)]

	参拝者数				
	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
主要箇所の参拝者数	183004(62.5%)	193098(65.1%)	145773(65.8%)	164725(65.1%)	209606(71.9%)
主要箇所を除いた参拝者数	109831(37.5%)	103671(34.9%)	75763(34.2%)	88423(34.9%)	81864(28.1%)
参拝者総数	292835(100.0%)	296769(100.0%)	221536(100.0%)	253148(100.0%)	291470(100.0%)

(仙台市消防局資料より筆者作成)

各消防署の管轄地域毎の「参拝者数1000人以上」の会場数およびその中で「主要箇所」とはされていなかった会場数を表6に示す。泉区におい

て区内の会場数全体に占める「参拝者1000人以上」の会場の割合が他地域と比較して目立って高いことがわかる。特に2011年・2012年両年では際

表6 「参拝者数1000人以上」どんと祭会場数 [件(%)]

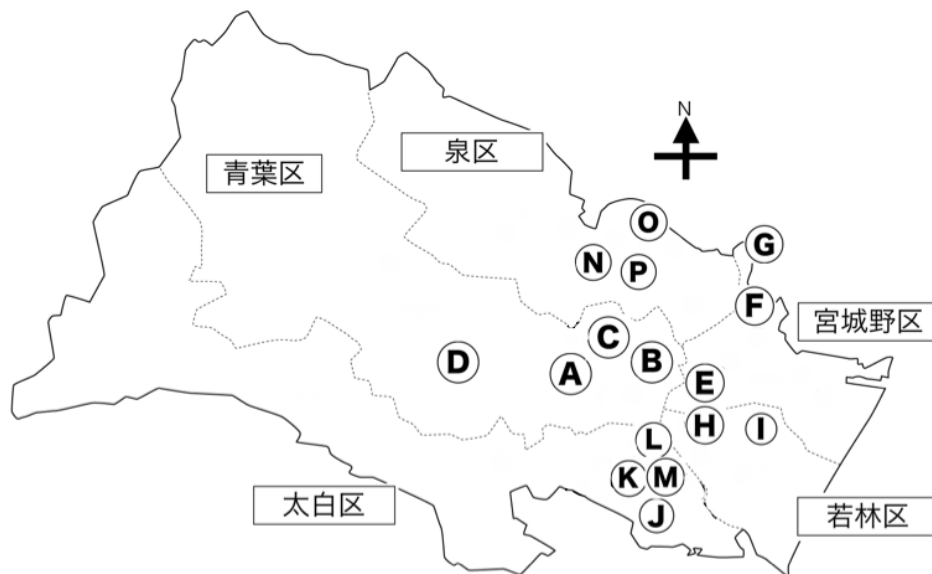
		2011年			2012年		
区	管轄署	総数	1000人以上	うち主要箇所以外	総数	1000人以上	うち主要箇所以外
青葉	青葉署	19(100.0%)	6(31.6%)	4(21.1%)	19(100.0%)	6(31.6%)	4(21.1%)
	宮城署	26(100.0%)	2(7.7%)	1(3.8%)	25(100.0%)	2(8.0%)	1(4.0%)
宮城野	宮城野署	30(100.0%)	7(23.3%)	6(20.0%)	28(100.0%)	8(28.6%)	7(25.0%)
若林	若林署	27(100.0%)	4(14.8%)	3(11.1%)	20(100.0%)	3(15.0%)	2(10.0%)
太白	太白署	27(100.0%)	7(25.9%)	4(14.8%)	27(100.0%)	9(33.3%)	6(22.2%)
泉	泉署	18(100.0%)	13(72.2%)	11(61.1%)	18(100.0%)	12(66.7%)	10(55.6%)
計		147(100.0%)	39(26.5%)	29(19.7%)	137(100.0%)	40(29.2%)	30(21.9%)
		2013年			2014年		
区	管轄署	総数	1000人以上	うち主要箇所以外	総数	1000人以上	うち主要箇所以外
青葉	青葉署	19(100.0%)	7(36.8%)	5(26.3%)	19(100.0%)	6(31.6%)	4(21.1%)
	宮城署	23(100.0%)	2(8.7%)	1(4.3%)	23(100.0%)	2(8.7%)	1(4.3%)
宮城野	宮城野署	28(100.0%)	4(14.3%)	3(10.7%)	28(100.0%)	6(21.4%)	5(17.9%)
若林	若林署	21(100.0%)	3(14.3%)	2(9.5%)	21(100.0%)	4(19.0%)	3(14.3%)
太白	太白署	27(100.0%)	7(25.9%)	4(14.8%)	27(100.0%)	9(33.3%)	6(22.2%)
泉	泉署	19(100.0%)	7(36.8%)	5(26.3%)	19(100.0%)	9(47.4%)	7(36.8%)
計		137(100.0%)	30(21.9%)	20(14.6%)	137(100.0%)	36(26.3%)	26(19.0%)
		2015年					
区	管轄署	総数	1000人以上	うち主要箇所以外			
青葉	青葉署	18(100.0%)	6(33.3%)	3(16.7%)			
	宮城署	22(100.0%)	2(9.1%)	1(4.5%)			
宮城野	宮城野署	28(100.0%)	7(25.0%)	4(14.3%)			
若林	若林署	24(100.0%)	5(20.8%)	3(12.5%)			
太白	太白署	27(100.0%)	10(37.0%)	6(22.2%)			
泉	泉署	19(100.0%)	9(47.4%)	6(31.6%)			
計		138(100.0%)	39(28.3%)	23(16.7%)			

(仙台市消防局資料より作成)

立っており、泉区内の「どんと祭」の6割から7割が「参拝者1000人以上」となっている。

泉区は仙台市のベッドタウンとして発展した歴史を持つ。終戦までは仙台市に隣接した一農村であったのが、昭和30年代以降大規模な宅地開発

図4 仙台市内のどんと祭「主要箇所」(2015年現在)



〔凡 例〕

青葉区	A: 大崎八幡宮 B: 東照宮 C: 青葉神社 D: 諏訪神社 (旧宮城町)
宮城野区	E: 榴ヶ岡天満宮 F: 八坂神社 G: 青麻神社
若林区	H: 陸奥国分寺薬師堂 I: 七郷神社
太白区	J: 中田神社 K: 多賀神社 L: 愛宕神社 (向山) M: 蛸薬師
泉区	N: 賀茂神社 O: 愛宕神社 P: 二柱神社

が進行し、区内を圍繞する丘陵地に広大なニュータウンを擁する現在の姿へと変貌した。大崎八幡宮までの移動には複数の交通機関の乗り換えが必要であり、殊に厳冬期における移動の負担の大きい当地では、ニュータウンの形成を契機として創設された「どんと祭」も散見される。このことから、泉区における「参拝者1000人以上」の「どんと祭」においては、会場近隣に居住するニュータウンの住民が主な参拝者層を占めていると考えられる。

6. むすびにかえて

以上、2011年から2015年までの5年間における仙台市内の「どんと祭」について、その会場数と参拝者数から概況把握を試みてきた。その結果、近年の仙台市内の「どんと祭」では、多数の参拝者を集める大規模「どんと祭」が少数、参拝者の少ない小規模「どんと祭」が多数あることが改めて確認できた。それとともに、参拝者数の規模からみた「どんと祭」の分布には地域差があり、小規模の「どんと祭」が多数を占めている地域があるのと共に、規模の大きな「どんと祭」の占める割合が比較的高い地域があることも確認できた。

規模の大きな「どんと祭」が他地域よりも高い割合を占めているのは仙台市泉区である。仙台市のベッドタウンとして発展した泉区では、ニュータウンの住民が運営に携わり、当日会場に足を運ぶのもニュータウンの住民が中心であり、1000人単位の参拝者を集める「どんと祭」が散見される。このようなタイプのどんと祭は、一般に大崎八幡宮への移動の負担が大ききことによって始められている。つまり正月飾りや古い神符などの適切な処分を主な目的として誕生した「どんと祭」と言い得るのだが、これが数十年の間に多くの参拝者を集めるようになっていった。このような「どんと祭」が、毎年開催を繰り返す中で正月飾りを適切に処分することのみでは説明し難い新たな機能や意味が当該の「どんと祭」に付与されていた可能性もある。ニュータウンの近隣において創設され、多くの参拝者を集める「どんと祭」における機能および意味の今日的な姿の把握・分析を今後の課題として、本稿を締めくくりたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、仙台市消防局のご担当者様には資料の閲覧等におき、多大なご厚意を賜りました。末筆にて恐縮ながら、この場におきまして改めて心より御礼申し上げます。

文献

安藤直子 (2006) 「どんと祭の現在から見えるもの」 仙台市教育委員会編『仙台市文化財調査報告書第305集 大崎八幡宮の松焚祭と裸参り調査報告書』第4章第2節、仙台市教育委員会：90-101. 宮城町誌編纂委員会,1969『宮城町誌（本編）』宮城県宮城町役場.

仙台市消防局 (2011-2015) 「どんと祭実施経過報告書」 仙台市消防局資料。

仙台市消防局 (2011-2015) 「どんと祭消防特別警戒実施結果」 仙台市消防局資料。

高橋嘉代 (2010) 「二極化する都市祭礼—宮城県仙台市の『どんと祭』の実施件数および参拝者数に注目して—」『論集』37：212-193 (43-62)。

THE STUDY ON NUMBER OF PARTICIPANT AND FESTIVAL OF “DONTO-SAI”: A CASE IN SENDAI CITY, MIYAGI PREFECTURE

Kayo TAKAHASHI KOKUBO

Aomori University

「どんと祭」とは、1月14日の夕刻から15日未明にかけて主に神社の敷地内で執り行われる祭事である。この祭事は現在、仙台市内のほぼ全域において実施が確認されている。近年の仙台市内では毎年140件前後の「どんと祭」が実施されている。2011年から2015年までの5年間において仙台市内で実施された「どんと祭」では、参拝者数1000人以上の大規模「どんと祭」が全体の2割から3割程度あり、これらの「どんと祭」で総参拝者数の7割前後の参拝者を集める。参拝者数が1000人以上の「どんと祭」が占める割合は仙台市泉区で比較的高い。泉区内ではニュータウンの住民が担い手となる「どんと祭」が複数確認されており、このことが泉区において大規模「どんと祭」が占める割合が高い一要素として考えられる。

キーワード：どんと祭、ニュータウン、参拝者数、祭事